

令和 2 年 9 月 9 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02395

研究課題名(和文) 帝室博物館総長時代の森鷗外に関する研究 博物館行政改革の学術的基盤とその形成

研究課題名(英文) A Study on Mori Ogai as President of the Imperial Museum : Academic foundation of museum administrative reform

研究代表者

山口 徹 (Yamaguchi, Toru)

相模女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：10367013

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)： 宮内省図書頭並びに帝室博物館総長として国家的重責を担った森鷗外晩年の活動のうち、第三代博物館総長として行った歴史的改革の学術的基盤を解明した。博物館における鷗外の主要改革は今日スタンダードなものとなっている時代別展示の導入、 学術報告書、目録類など出版物の創刊・増加、 正倉院宝物観覧の一般研究者への開放の三点にまとめることができる。これらはこれまで国内事情との関連において話題とされてきたが、本研究は同時代ドイツにおける世界的先進事例と具体的に関連性を持っていたことを明らかにしたうえで、その改革が当時の日本の強みを最大限に発揮するものであったことについて言及した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代日本を代表する知識人森鷗外の最晩年は、宮内省図書頭並びに帝室博物館総長としての活動に捧げられたが、その旺盛な取り組みの具体については知られていないところが多い。本研究は、今日世界的に標準なものとなっている博物館・美術館における時代別の展示が、いち早く鷗外の主導によってなされた経緯を、当時の国際的な状況との関わりにおいて明らかにしたものである。歴史に残る行政改革の条件を具体的に明らかにした点に一定の意義があるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)： Mori Ogai took on the important duty of director of the Imperial Museum in his later years. In my research into this period, I clarified the academic foundations of his historical reforms. The major museum reforms he enacted can be summarized in the following three points. (1) Introducing the historic-period specific exhibits that are standard today, (2) Encouraging publications (starting publication of academic reports and catalogs), (3) Expanding the number of general researchers, intellectuals allowed to view the treasures of Shosoin. Although these developments have been discussed in the context of domestic affairs, I show how they were closely related to the world-leading case of Germany's museums. In addition, I expound on how Ogai's reforms augmented the contemporary strengths of Japan.

研究分野：日本近代文学

キーワード：森鷗外 博物館行政 美術制度 棕鳥通信 帝室博物館

1. 研究開始当初の背景

陸軍省医務局長の重責を8年半の長きにわたってつとめて退いた森鷗外は、晩年再び官界に還って帝室博物館総長兼図書頭、帝国美術院初代院長の大役を担って生涯を終えた。文学作品を量産し「豊熟の時代」と呼ばれた医務局長時代とは異なり、このとき鷗外は「筆硯廃絶の覚悟」で三機関の抜本改革と創設に臨み、歴史的な成果を挙げた。だが、文学者としての鷗外の活動はほぼ絶えたことから、従来型の文学研究のアプローチからは十分捉えきれなかった領域となっている。

博物館総長、美術院院長時代の業績については、山崎一穎(2006)、須田喜代次(2010)が日記や書簡、新聞記事などの記述をもとに概要を提示している。また、2012年に東京国立博物館140周年特集陳列として「生誕150年 帝室博物館総長 森鷗外」が開催。鷗外自筆の新資料「上野公園ノ法律上ノ性質」が館内から発掘され、鷗外の実務の一端が明らかになるなど、近年、注目が集まってきている。

上記の先行研究によって、鷗外は博物館総長に就任した直後から、品目種類による分類陳列から歴史時代別による陳列替え、予算獲得、人事、正倉院宝庫内拝観資格拡大の諸改革に着手し、観覧者統計および予算獲得額、学術刊行物のいずれにおいても大幅な増加に成功したことが知られるようになってきた。しかしながら、先行研究では、そうした業績を後追的に整理した段階に留まっており、なにゆえ鷗外が就任直後から果敢な改革の方針を示し、実行しえたのかという条件の解明には至っていない。

申請者は平成25年～27年度の基盤研究(C)採択課題「森鷗外の訳業を媒体とした1910年代日欧文化情報伝達の調査と分析」(研究代表者)の研究調査を進めるなかで、博物館総長兼図書頭時代(1917・12～1922・7)の鷗外の施策に、これ以前に鷗外が精力的に取り組んでいた海外情報翻訳記事「椋鳥通信」(1909～1914)の記事内容と重なるものがあることに気が付いた。本研究では、「椋鳥通信」中の美術関連および博物館行政の話題を抽出し、そのソースとなった独文記事及び具体的事例との照合作業を通じて、後年の施策の基盤となった鷗外の知見獲得の経緯を明らかにしようとしたものである。

2. 研究の目的

帝室博物館総長兼図書頭として官界に戻ってからの鷗外の活動は、文学に高い比重を置いてきた従来の研究においては、切り離された領域として扱われる傾向にあった。だが、鷗外を帝国美術院初代院長に任命した文部大臣中橋徳五郎が「院長たるべき人は、美術、文芸、音楽等の総ゆる芸術に知識を有し閱歴声望共に高き人」としたように、鷗外という総合的な知識人の偉業と国家的文化機関の基幹部の形成について正当に評価するためには、既存の研究が自明視してきた領域の線引きを抜本的に改める必要がある。

本研究の特質は、晩年の官界における活動をそれ以前の文業との具体的接続点から照射・復元する点にある。この従来になかったアプローチにより、諸機関の長として鷗外が打ち出した施策の裏付けとしてあった学識の蓄積と特色とを把握することがはじめて可能となる。また、欧米主要先進国における制度・政策面の動向をどのように受容し、日本国内にどう適合させたか、経緯を具体的に解明できることから、日本近代文学研究はもちろん、諸外国との影響関係を含めた文化研究全般に新たな知見と情報を提供し得る。加えて、現在の東京・京都・奈良国立博物館、宮内庁書陵部、日本芸術院の基幹となる部分が一人の近代的知識人を中心としていかに形成されたかといったことを詳らかにすることで、関連の史的研究にも寄与するものである。

3. 研究の方法

本研究で中心となる仕事は、「椋鳥通信」にみられる美術および博物館行政に関わる記事の抽出と、その情報ソースとなったドイツの新聞・雑誌記事、さらには美術及び美術館制度に関する諸研究の調査・照合・分析・考察である。「椋鳥通信」の記事は、長短含め多種多様なスタイルを示しているが、原文そのままの翻訳であるより、核となる内容を簡潔にまとめた抄訳がほとんどである。そのため、原文との照合作業や対象に関する重点的な調査を通じ、削ぎ落とされた部分を検証することで、鷗外が何を受信し、どの部分を取捨選択したか、具体的に把握することが可能となる。いわば「椋鳥通信」の余白の究明によって、この方面での鷗外の知見の形成条件と特性とを測定することが本研究の基本的な方法と方針である。鷗外が参照したと考えられる世

界的な先進事例について調査し、裏付けを得るため、ベルリン州立図書館での文献資料調査をはじめ、関連機関での実地調査を実施した。

4．研究成果

本研究では、森鷗外『椋鳥通信』に見える美術関連、博物館行政に関わる広範な話題を抽出し、それが後年の博物館改革にどのような影響を与えたか（いかに知的基盤として大きな役割を果たしたか）という点を中心に、これに関わる鷗外の活動を前後に探り、明らかにしてきた。成果の一部は、次の欄に挙げた雑誌掲載論文3本と、これに先立っておこなった学会発表2件で、それぞれ個別の内容として報告し、本研究の最終的な成果については査読付論文にまとめた。なお、他にも本研究に関わるコラムなど執筆の機会（『別冊太陽 クリムトとシーレ』内）があり、そちらでも社会にむけて成果の発信を行うことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山口徹	4. 巻 102
2. 論文標題 鷗外「妄想」周辺 ファウスト受容と作品生成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鷗外	6. 最初と最後の頁 29 - 43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口徹	4. 巻 2
2. 論文標題 森鷗外宛欧州からの手紙	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文京区立森鷗外記念館所蔵森鷗外宛書簡集 2	6. 最初と最後の頁 84-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口徹	4. 巻 106
2. 論文標題 鷗外における博物館改革の素地 ある博物館人をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鷗外	6. 最初と最後の頁 93-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口徹
2. 発表標題 「森鷗外－美術界への注視と断行」
3. 学会等名 相模国文研究発表会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山口徹
2. 発表標題 「鷗外「妄想」周辺」
3. 学会等名 鷗外研究会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----